

あとがきに代えて 西脇順三郎と瀧口修造の絵画展

佐谷和彦

佐谷画廊恒例のオマージュ瀧口修造展は、今回で二十四回を迎える。今年も瀧口修造生誕百年に当たるので、それを記念し、瀧口修造の師である西脇順三郎をテーマに決め、両先生の絵画二人展とした。別言すると、超自然主義者と超現実主義者の尊敬しあう師弟二人展でもある。このように希有な展覧会を開催することができて、うれしくありがたく思っている。

因みにお二人の年譜を見ると、西脇順三郎は一八九四年一月二十日新潟県小千谷市に生まれ、一九八二年六月五日に出生地で逝去、享年八十八才。瀧口修造は一九〇三年十二月七日富山県富山市に生まれ、一九七九年七月一日東京都新宿区下落合で逝去、享年七十六才。西脇は瀧口の九年先輩である。

瀧口は慶應義塾大学文学部教授であった西脇を慕い、慶應義塾大学での講義のほか、西脇家をしばしば訪問し、西脇からアンドレ・ブルトンのシュルレアリスムを知った。

私の手許にある西脇著『超現実主義詩論』（厚生閣書店刊、一九二九年十一月 現代の芸術と批評叢書第十四

編)は、我が国におけるシュルレアリスムについての最初の著書である。瀧口はこの著書の最後の章に「ダダよりシュルレアリスムへ」と題し、三十三頁にわたるシュルレアリスム絵画論を記している。この著書は西脇・瀧口の共著といふべきものである。

その翌年一九三〇年六月、同じく厚生閣からアンドレ・ブルトン著／瀧口修造訳『超現実主義と絵画』が出版された。この著書にはモノクロの写真で五十点(二頁一点)のシュルレアリスムの絵画が収録されている。作家はピカソ、ブラック、デ・キリコ、ピカビア、エルンスト、マン・レイ、マッソン、ミロ、タンギー、アルプの十名で、一九〇八年から一九二七年までの作品(二十年代が全体の約七〇%を占める)が収録されている。たまたま数年前に私はブルトンの原著(ガリマール書房刊、一九二八年)を入手したが、収録されている作品は七十七点であった。

大事なことは、この瀧口訳のブルトン『超現実主義と絵画』は本邦初のシュルレアリスム絵画の本格的な解説で、我が国の美術界にとっては歴史的な意味を持つ著書である。と同時に、瀧口修造にはシュルレアリストとしての生き方を決定づける動機になった。その意味は大きい。西脇と瀧口との関係について、両者がどのように互いを評価していたかを示す文章をこのカタログに掲載した。

「あまりにも個人的な、あまりにも超個人的な詞」 瀧口修造

〔西脇順三郎全集〕 内容見本 一九七一年 筑摩書房刊

「青い羽根のあるコラージュ文 西脇順三郎氏に」 瀧口修造 (『無限』二九号 一九七二年)

今回の展覧会の内容について述べる。

展示作品は、西脇順三郎作品(油彩、水彩、ドローイング等)十五点、瀧口修造作品(デカルコマニー、バント・ドローイング、水彩等)二十五点余りを展示する。

会場は東京オペラシティ五十四階「トップルーム寺田」で、寺田小太郎さんとの共催である。会期は十一月一日(土)から十六日(日)まで。休廊日は十一月四日(火)と十日(月)。営業時間は午後一時〜七時まで。

カタログには、主要な作品の写真(西脇十一点、瀧口四点)、西脇・瀧口の肖像写真二点(羽永光利撮影)を収録している。

テキストは次の五編である。

「西脇順三郎の絵画・私見」 鶴岡善久(詩人・評論家)

「詩と歩く西脇順三郎」 藤富保男(詩人)

「近代人の淋しさ」 篠原資明（京都大学大学院教授）

「西脇順三郎の永遠の夏」 朝吹亮二（慶應義塾大学、フランス文学者）

「散歩する詩人の絵 凝視する詩人の言葉を借りて

——西脇順三郎の絵と瀧口修造—— 光田由里（渋谷区立松濤美術館学芸員）

それぞれの立場から個性的な文章をいただいた。西脇・瀧口を理解するための最適のテキストで、深謝している。主催者としては、西脇順三郎プロフィールと併せてお読みいただければ幸いです。

この展覧会開催に際し、西脇作品をお借りするため二度、小千谷市立図書館を訪問した。西脇順三郎記念室で詩集等文学関係の図書資料の展示室および、油彩等約二十点が展示されているギャラリーを拝見した。小千谷市は西脇の絵画作品を五十四点収蔵されている。西脇の絵画の全貌を知るためには必見である。責任者の山本清さんから、西脇家のことを含め西脇コレクションについて種々説明していただき、感謝している。なお、西脇が瀧口に贈った水彩「砂丘―鳥取」をご遺族からお貸しいただいた。感謝申し上げます。

ところで私は金沢の旧制高校時代、理科系であるにも拘わらず文学・美術に日増しに傾倒するようになった。『旅人かへらず』『あむばるわりあ』を買った記憶がある。しかし念のため書

棚を探したが見当たらない。恐らく売り払ったのだと思う。ところが『あむばるわりあ』『あんどろめだ』が現れた。ともに荻窪の岩森書店のシールが貼ってある。ということは一九七〇年以降に買い求めたということになる。私にとって気になっていた詩人であることは確かなのだ。気になって購入してもあとがきを読んだだけで、雑事に紛れてそれきりになってしまったことが私の場合多い。さすがオマーージュ瀧口修造展で西脇をテーマに開催となると違う。改めて西脇順三郎詩集等を机上に置き、鍵谷幸信、飯島耕一、新倉俊一各氏等の評論やエッセーを拾い読みをするニワカ勉強となったのは必然である。特に前述の五編のテキストは貴重であった。その結果、少し見えてきた。

西脇の「脳髓の日記」は興味深く読んだ。中でもフランス・ベーコン（一五六一〜一六二六）の思想に、西脇は強く共感し大きな影響を受けていることが分かった。西脇は次のように記している。

すぐれた美はその均衡において奇異なところがある（ベーコン）。矛盾はいつも奇異なものや「おかしみ」を人に感じさせる。……古典主義はあまりに奇異なものやおかしみを恐れる。これに反してピカソや超現実主義者は奇異なものやおかしみを強調しすぎて、醜悪なものやグロテスクなものを芸術の精神としている。その醜悪さが激しすぎて重大なおかしみをも破

壊している。パウル・クレーはまだおかしみを保有している。……美と奇なるものを適当に混じたものをベーコンはすぐれた美と知っている。……

高校二年（一九四七年、時に十八才）の英語の教科書で、エドガー・アラン・ポーの「リジイア」を読む機会があり、シヨックを受けた。実はここところが私の美術開眼の始まりなのである。五十六年前の私の興奮が蘇ってくる。この小説はまことに幻想的な物語で、リジイアの神秘的な容姿、實在不可能な存在としか見えない女性を、生きているかのように描写している。そしてその美しさは、ベーコンの美の定義によって示されているのだ。『チャタレー夫人の恋人』の著者D・H・ロレンスは「リジイア」はポーの恋物語であり、この作品の幻想性のゆえに却って彼自身の物語として真実味があると語っている。

ポーのそのサワリの部分を、阿部知二訳（ポオ全集Ⅰ 東京創元新社刊、一九六三年八月）で示したい。

……その（リジイアの）容姿は、われわれが古代の異教徒の美術においてあやま謬って教えこまれて崇拝するところの、あの規格的な美ではない。ヴェルラム卿ベイコンは、美のあらゆる形式と種目について正しくもいっている。「その均衡に何らかの奇異を持たぬかぎり、絶妙の美とは在り得ないのである」と。……それから、私はリジイアの大きな眼に見入る。……

私がシュルレアリスムの画家、特にマックス・エルンスト、パウル・クレー、イヴ・タンギー等に強い関心を持ったのは、このベーコンの言葉の力である。さらに私を加速させたのは瀧口修造であった。当時の美術雑誌（みづゑ、アトリエ、創美等）に寄稿されていた瀧口修造の文章をくり返し読んだ。これまでの写実的な具象絵画はもの足りなくなり、次第にシュルレアリスムの絵画にのめり込み、さらに広く現代美術の世界に踏み込むことになる。

銀行に二十年勤め、南画廊に転じ、京橋で一九七八年に佐谷画廊を開設した。一九七九年七月一日に瀧口先生が亡くなったが、私は瀧口修造への想いが増々ふくらんでいくのを押さえることができなかった。オマーージュ瀧口修造展への胎動である。

一九八一年七月、詩画集「物質のまなざし」詩・瀧口修造、石版・A・タピエス、テキスト・田中清光の構成で、第一回オマーージュ瀧口修造展を開催した。その後、原則として毎年命日月の七月、瀧口修造にかかわる作家の展覧会を開催してきた。第二回以降は次のとおりで、シュルレアリスム系の展覧会は十六回を数える。

2 「妖精の距離」、3 加納光於、4 山口勝弘、5 瀧口修造、6 荒川修作、7 M・デュシャン、8 赤瀬川原平、9 マン・レイ、10 J・ミロ、11 実験工房、12 福島秀子、13 A・ブルトン、14 北代省三、15 松澤宥、16 「七つの詩」、17 駒井哲郎、18 榎本和子、19 阿部展也、20 中川幸夫、21 池田龍雄、22 田中清光、23 池田満寿夫、そして今回、二十四回目は西脇順三郎となった。

西脇順三郎の絵画を概観すると、おおらかな風景画が多い。全作品のほぼ $\frac{2}{3}$ と思われる。その基調の色彩はブルーである。地球の根源は母なる海であり、ブルーである。この地球を支えているのは植物である。グリーンの植物が存在して、人間、動物は生きている。西脇が植物学者のように植物に詳しいのはむべなるかな、と納得できる。また、人物画は際立っている。特に女体像はゆったりとして柔軟な線の動きが官能的である。

ところが私には西脇の詩は難解なところがある。新倉俊一さんの辞書（『西脇順三郎全詩引喩集成』筑摩書房刊、一九八二年）が必要である。しかし絵画の方はズバリ眼で見れば分かる。風景の世界にすぐさま入り込むことができる。

この難しい詩とやさしさの絵画の乖離現象に戸惑うのは私のみではないであろう。しかしこの二つとも西脇自身の作品であることは事実である。この二つをつなぐものは何か？

何かあるな、と感じたが、そのとっかかりは前述したように私の場合フランス・ベーコンであった。難解な詩と、自然をゆったりと描く絵画。前者は知性、後者は感覚と読み替える。

この二元性は西脇の生き方なのだ。この二極の架け橋は「自然」であると思う。ベーコンは「自然が結んだものを離し、離しているものを結ぶ」のが想像力の源泉であるという。西脇が「自然」を架け橋に、物悲しく感じつつ橋のたもとで佇みつつ、考えている風景が見えてくる。

この次第に見えてくる西脇順三郎という人物は、汲めども尽きぬ器量の大きい人間であることが分かってきた。米国の世界的な詩人、エズラ・パウンドがノーベル文学賞に西脇を推したことを一言申し添える。

最後に、一九七四年某日、私の親友山崎勉さんが突然、勤め先の南画廊に現れた。何と西脇さんとその友人の三人づれであった。私がこの大詩人に会ったのは生涯でこの一度だけである。その時の西脇さんのおだやかで楽しそうな風貌を、今なお私はなつかしく鮮明に記憶している。私は遠くから眺めていた西脇ファンなのである。

二〇〇三年九月二十六日